

和光大学の先生たちに、  
いま、きみたちに読んでほしい本を  
3冊ずつえらんでもらった。  
これがその第一集。  
年内にもう一冊か二冊、  
このつづきをだして、  
来年の春、  
一冊のきれいな本にまとめるつもり。  
たのしく読んでください。

# 本ぐらい歩きながらだつて読める

津野海太郎（図書館長）

私は歩きながら本を読む。もしきみたちが、鶴川の駅から大学へむかう道を本や雑誌を読みながら歩いている太った男を見かけたら、それが私だ。

じぶんのふるまいが他人の目にへんに映つているらしいことは、私だつて気づいている。でも、やめない。なぜ？ そんな程度のことでやめるのがもつたいいくらい、本を読むのがたのしいから。このたのしみのためなら、ひとの目なんか屁の河童よ。

道を歩きながら本を読んでいると、本というものが、いかにうまくつくれた道具であるかがわかつてくる。小さくて軽い。だから

持ちはこびもかんたん。ページをめくるだけで新しい世界がつぎつぎに出現する。読むのにあきて、なにかぼんやり考えたくなつたら、ページ面からちよつと顔をあげればいい。そうすれば、すぐに本の世界のそとでられる。道のむこうからクルマがやつてきたときなども同様——。

その点、映画や音楽はすこしちがう。じぶんの速度、じぶんのリズムで勝手にどんどんすすんでゆき、ひとのこころやからだをつよくしばる。

本にもしばる力はあるけど、映画や音楽にくらべれば、その力はよわい。読者が自発的にページをめくつて読みすすまないかぎり、じぶんからはなにも語らない。読者が気をぬければ、とたんに本の世界は崩れて消えてしまう。読書のかぎは自発性なのだ。たのしい努力といつてもいい。読む側に多少の努力と、それをじぶんからだのしむ気分がなければ、本なんか、ただの「印刷した紙をかたく綴じ

たかたまり」にすぎない。

この小冊子を見ればわかるように、私にかぎらず、和光の先生たちはみんな本が好きだ。とくにかたい本がね。

でも、おそれることはない。先生たちが、どこで、どんな姿勢で、これらの本を読んでいるかを想像せよ。先生たちも、いつも研究室のデスクで背筋をピンとのばして読書にはげんでいるわけではない。かたい本だつて、つきあい方しだいで、いくらでもやわらかくなる。歩きながらだけでなく、私は風呂でも本を読む。「そんなのへんですよ」だつて？ ケータイを片手に自転車にのつてるようなへんなやつが、よくいうよ。

きみたちに  
ぜひ読んでほしい本を  
三冊あげると……

# 浅見克彦

(表現文化学科)

①『遊びと人間』ロジェ・カイヨワ

(講談社学術文庫)

②『カルチュラル・アイデンティティの諸問題』

スチュアート・ホール, ポール・ドウ・ゲイ編  
(大村書店)

③『パリの憂鬱(憂愁)』C・ボーデレール

(岩波文庫ほか)

①—ホイジンガの『ホモ・ルーデンス』に端を発する「遊びの文化論」は、現代文化の空氣とぴったりマッチするものである。カイヨワが提示した、アゴーン(競争)、アレア(賭け)、ミニクリ(模倣)、イリンクス(めまい)という遊びのタイプは、スポーツ、TVゲーム、遊園地、テーマ・パークといったさまざまな文化を理解するうえで、不可欠のものである。何でもありの文化を問題にするとしても、やっぱり論理が基本なのである。

②一世の中、相変わらず「自分探し」のゲームで騒がしい。寝ころがつて「自

分」を求める態度は不毛だろうが、個人と集団のアイデンティティの問題は、現代文化の一つの軸点には違いない。SFの近未来都市まがいの混合文化のなかで、安定したアイデンティティのささえを失った者たちが、多様な混交と定まりなき流転を引きうけてゆくことの可能性を示唆する本書は、読む者に必ずや複数の刺激をあたえてくれるはずである。

③—「汚辱」と「悲惨」にみちた都市を走り抜けようとする思想の叫びがそこにはある。都市の巨大な悪魔的力は、人間の「恐るべき」エネルギーを表現している。そして、その人間の「眞実」を迂回するような芸術は、その名に値しない。アーティストは、どれほど孤独を抱えこもうとも、都市の群衆に湯浴みをし、都市の圧倒的な力の渦に耐えうる強さをそなえねばならないということ、このことをボーデレールの迫力ある言葉は語りだしている。

# 天野みどり（文学科）

①『日本語の歴史 青信号はなぜアオなのか』小松英雄

笠間書院

②『小森陽一、ニホン語に出会う』小森陽一

（大修館書店）

③『宮廷の道化師たち』アヴィイグドル・ダガン

（集英社）

①小さな頃、誰にでも言葉について「なぜ」と思うことがたくさんあつたはず。「本当は緑色なのにどうして青信号って言うの？」などと親に質問した覚えはないだろうか？この本は現代の日本語の中にあるたくさんの疑問を出発点にして、日本語はどのように運用されてきたのか、どのように変化してきたのかをわかりやすく述べている。この本を読んで、たくさん疑問を育てて考えることの楽しさを知つてほしい。

②この本はとにかくおもしろい。引き込まれるようにどんどん読んでしまうが、底に流れている著者のメッセージはことばの問題として大変重要なものだ。

特に、本を読むのは好きだけど国語の授業は嫌いだったという人、正しい（と思いいこんでいる）敬語が使えなくてそういう場面に遭遇すると妙に緊張したことばが出てこなくなってしまう人、逆に自分のことばに自信があつてまわりの汚い（と思っている）ことばに汚染されるのはいやだと思っている人におすすめ。

③知的で淡々とした語り口で物語は進む。しかしある一シーンが私の心に深く突き刺さり、今でも抜けない。訳者の一人である千野栄一氏は本学の学長もなさつた、言語学者。先生の言語学の著作も紹介したいが、お亡くなりになる半年前に刊行された、先生の魂を感じさせるこの本を、一人でも多くの若者に読んでほしい。読後は「内容にびつたりの表」と先生がおつしやった、赤く美しい表紙絵もまた、心に響くはずである。

# 伊藤光彦（表現文化学科）

- ①『与謝蕪村 郷愁の詩人』萩原朔太郎  
岩波文庫
- ②『一下級将校の見た帝国陸軍』山本七平  
文春文庫
- ③『逝きし世の面影』渡辺京二  
葦書房

① 中学生の頃亡父の書棚でみつけ、いろいろ五十年余、読んで読んで読み飽きない一書。詩（コトバ）がいかに時空を超えた存在になり得るかを知つて、生きる元気が出る。

② これを読むと、日本は太平洋戦争に負けてよかつた、とつくづく思う。夜郎自大、小役人の形式主義、現実を見ない神があり。敗戦で五二%ほど消えた。大学にも残る四八%の日本陸軍的ヤクザ根性をいかにボクメツするか。

③ 幕末維新期に来日した外国人はこの国の庶民に、楽しく、親切に、正直に

生きる希有な天稟を見いだした。好奇心に満ち、克己心が強かつた。そのような人びとの世は、逝つてしまつたのである。（和辻哲郎文化賞受賞）

## 井上輝子

（人間関係学科）

- ①『第二の性』ボーヴォワール  
新潮文庫
- ②『現代日本女性史』鹿野政直  
有斐閣
- ③『やさしいことばで日本国憲法』  
マガジンハウス

「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」の名言で知られる①は、一九四九年の出版以来、フェミニズム・女性論の古典として、世界中で読み継がれてきた。女性の置かれてきた状況を、豊富な資料とさまざまな学問を駆使して記述・分析した本書に出会つたことが、私にとつては、やがて女性学を専門とするきっかけとなつた。かつての邦訳には間違いが多いとして、一九九〇年代に『第

「二の性」を原文で読み直す会」という女性グループが訳出し直した「決定版」がお薦め。

②は、戦後の民主化政策による女性の参政権獲得、家制度の廃止から、高度経済成長期における性別役割分業の成立、七〇年代以降のフェミニズム運動と政策の展開、そして最近のバッカラッシュに至る歴史を、フェミニズムを軸としつつ、ていねいに辿った名著。女性の書いた手記など豊富な資料から、戦後史を生きた女性たちのナマの声が浮かび上がってくる。親世代が歩んだ生活と思想の歴史を知るためにも、若い人たちに、ぜひ読んでほしい。

③は池田香代子訳、C・ダグラス・ラミス監修・解説。憲法改正論議が喧しいが、実は日本国憲法の中身をはつきりとは知らない人も最近は多いのではないだろうか。本書は、英語版の憲法条文を、主語を「日本国民」ではなく「日本のわたくしたち」とするなど、わかりやすいことばで訳し直し解説した本で、日本語の正文と英語版との対照表も載せてある。「婚姻における両性の平等」を定めた第

二十四条さえ見直しの対象とされかねない現在、まずは憲法の条文をじっくり読み直すことを薦めたい。

## 岩本陽児

（人間発達学科）

- ①『バードケージ』 清水義範（日本放送出版協会）
- ②『一条ゆかり主義』 一条ゆかり（白泉社）
- ③『怒りの方々』 辛淑玉（岩波新書）

私たちは、人のことを理解しようとする時、まず出身地や趣味を尋ねたりするものだが、「書棚に並んだ本をみれば、どんな人かは一目瞭然」と、学生のころ心理学の授業で聞いた記憶がある。おそらくや。本をたかが三冊紹介するといつても、見る人が見れば「私の知らない本当の私」を見透かされるのかもしれない。そうでなくとも、食べている弁当の中身をじろじろ覗かれているようで、居心地

が悪い。あうー。

さて①は、出世作『そばときしめん』以来、新刊の刊行を楽しみにしている作家、清水義範の最新作である。主人公は毎日がちつとも楽しくない予備校生。ふとした事からある男性の命を助け、そのお礼にとなんと一億円をもらってしまう。ただし条件があつて……。

この作者、サービス精神旺盛につき、むちやむちやかわいいアイドルの卵は出てくるし、家族の問題や消費主義・拜金主義（オリンピックにあらず）の問題、発展途上国の貧困、テレビ番組の虚実など、例によつて盛りだくさんだが、要是はさまざまな出会いを通じて個性と個性が響きあい、お互いが心を開かれながら成長していく物語。清水作品である以上、娯楽作品には違いないのだけれど（独断だがきっとそうだ！）、この点本書は、実はロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』などと同じ、小説の王道をいくものであつた。「死と再生」、「中有からの回帰」の物語として文学的に読み解くのも楽しい。

②は、恋愛マンガの女王様のスーパーエッセイ（副題にそう書いてある）。

「世界中敵に回しても、私だけは私を愛してあげよう」と言い放つてはばからない、一条ゆかりという漫画家のこととは、本書を読むまで全然知らなかつた。何でも、「第一回〇ぽん新人漫画賞」を受賞して、十九歳でデビュー。それから三十年経つ今も現役で、「トップで独走中」だそうである。おそるべし。二十四編あるエッセイは、テーマがこれまで盛りだくさんだが、自分史を振り返りつつ、迫力あふれる人生観が語られている。「恋愛つてハッピーなら楽しいし、ズタボロになつてもネタになる」。そういうこと言うかなあ、ふつう。

だがしかし、一条ゆかりという人は、単なるジコチュウではなく、実はサービス精神旺盛ながらいたつて生真面目な生活者なのではないだろうか？この私の鋭い洞察（！）は、『一条ゆかりの食生活』（集英社、二〇〇二年）を読んで、ある程度裏付けられたと思つていい。

③が、私にとつて気になる発言者、辛淑玉の近著。そのきっかけは、講談社刊『不愉快な男たち』を読んだことであつた。本書の前半では、著者の身近で起き

た、抑圧された在日コリアン社会ならではの女性差別や家庭内暴力など、はけ口を内に求めた「怒り」の例がいくつも語られていて切ない。それが、後半では、「社会への怒り」として、石原都知事の人種差別発言に対し、国連、人種差別撤廃委員会から勧告を取り付けてくるところにまで展開するところがすごいぞ。「キレる」ことがコミュニケーションを閉ざしてしまうのと違い、怒りを正当に伝えることは、コミュニケーションの重要な手段であるとの主張は、なるほど納得がいく。

ところで、この本のはらまきに「激辛ナントカ」と書いてあつたのは、ことによるとおやじギャグというものであろうか。うう、恥ずかしいぞ岩波書店。

## 上野俊哉

(表現文化学科)

- ①『コルシア書店の仲間たち』須賀敦子（文春文庫）  
②『意識と本質——精神的東洋を求めて』井筒俊彦（岩波文庫）

### ③『マルクスのために』ルイ・アルチュセール（平凡社ライブラリー）

①はヨーロッパに滞在するさい、よくもつていく本である。戦前のブルジョワの日常を知る者の凛とした佇まいと、「六八年」の社会的、文化的激動やカソリック左派の記憶が交差するなかで、ミラノの小さな書店に集つた者たちの「物語」が紡がれる。外国语で感じ、考えながら、日本語で書いていくことの意味が、全体としてやわらかな問いとして差し出されているように見える。本書にはどこか暗さがただようが、若き日々の回想につきものの苦さがそうさせている。

②では「構造主義以後」の知見や理論と、イスラム圏からアジアをつらぬく「精神的東洋」がスパークするようにぶつかりあう驚異的な書物。密教、禪、チャーマニズム、ユダヤやイスラムの神秘主義などを「意味分節」や「言語アラヤ識」といった概念で読み解していく。山や海、花や樹々を眺めながらこの本を読む時間は、日常のくだらぬ雑念から解放されるひとときもある。筆者が唯物論者でありつつ、同時にスピリチュアリティの存在をリスペクトする者であるの

は本書のおかげと言つていい。

③はフランス共産党の哲学者の手による画期的なマルクス論だ。その徹底した唯物論と反ヒューマニズムの姿勢には、とりわけ強い影響を受けている。論文「矛盾と重層的決定」は毛沢東の『矛盾論』へのアンサーソングとして今も輝いているし、一風変わったブレヒト論やイタリア演劇論も読み応えがある。思えば、筆者が和光大学に入学した一九八〇年、カソリック左派から共産党への自身の転回を運命づけた最愛の妻エレーヌをアルチュセールは殺害し、彼はスキヤンダルと沈黙に彩られた晩年をおくつたのだつた。人が生きることそのものの狂氣、あるいは『善惡の彼岸』について想いながら、しばしば本書を繙いている。

## 内田正夫

(和光大学総合文化研究所)

①『谷中村滅亡史』荒畑寒村 (岩波文庫)

②『蘭学事始』杉田玄白 (岩波文庫)

③『沈黙の春』レイチエル・カーソン (新潮文庫)

①—明治十年代以来、数十年にわたつて足尾の山々を草木一本生えない裸山に変え、渡良瀬川下流を繰り返し襲う洪水によって数万ヘクタールの水田を重金属で汚染された泥土で覆い尽くした足尾鉱毒事件。さらに政府はこの事件の幕引きを図るために谷中村の農民を追い出し、ここを遊水池に変えてしまつた。本書は、企業と、これと結託した政府の行為の不当性を告発したドキュメント。荒畑寒村、弱冠20歳の著書。権力者の不正義を憤る心を学んでほしい。

②—明和八年（一七七一）、三十八歳の杉田は、オランダ語の解剖学書の翻訳に取り掛かつた。教師はもちろん教科書も辞書もなく、同盟の社中＝現代風にいえば自主ゼミの仲間とともに暗号を解読するようの一語一語を詮索読破すること四年、日本にはじめて西洋医学を紹介する本『解体新書』が出版された。『蘭学事始』は老年になつた杉田が若かりし日々のこの翻訳の苦労と喜びを回想しつつ

書き記したもの。新しい知識を渴望しこれに体当たりしていく熱気が伝わってく  
る。外国語を苦手と思う人に勧めたい。

③第二次大戦後、人々はDDTをはじめとする大量の合成農薬を農地と森林  
に散布はじめた。それは農林病害虫と伝染病媒介害虫の抑制に劇的な効果をも  
たらしたが、同時にほかの生き物たちにも破滅的な影響を与え、さらにはめぐりめ  
ぐつて人間の健康にまで影響を与える恐れのあることが見えてきた。本書は自然  
においてあらゆるもののが繋がりあつてることを人々に理解させ、無数の化学物  
質によつて自然の循環を搅乱させつつある現代社会のあり方に警告を与えた古典  
的な本。

## 梅原利夫

(人間発達学科)

①『ジャン・クリストフ』ロマン・ロラン

(みすず書房、岩波文庫)

②『現代教育の思想と構造』堀尾輝久

(岩波同時代ライブラリー)

③『日本の黒い霧』松本清張

(文春文庫)

①—私が一七歳の時「生きる悩み」の危機を救つてくれた作品だ。息苦しい時  
代と果敢に闘い、自己確立へ向かつた人間の一生を描いた『教養小説（ビルドウ  
ングスロマン）』である。

ベートーベンがモデルの一人だが、彼を超えて豊かである。独仏を舞台にし、  
ロランは二〇世紀前半の二つの大戦に反対し、世界平和と人間形成とを結びつけ  
たノーベル賞作家である。現在も本書を開くが、あの青年前期の衝撃的な感動が  
よみがえり、なつかしい。

②—教育学を本格的に学ぼうとした学生・大学院生時代に精読した名著である。  
子どもの学習する権利を中心概念に、近現代教育の論理を展開した本書に、「教  
育の科学」の生命力を読み取り、魅せられた。堀尾さんは世界と日本で行動する  
「思索する教育学者」である。私が学生時代にゼミに参加して学んだが、いま同

じ民主教育研究所の代表（堀尾）と機関雑誌編集長（梅原）として共同の仕事を携わっている。その視線は人間にやさしく、理論には冷静で緻密である。

③—有史以来初めて日本が他国に占領支配されていた一九四五年～五二年の間に起きた、権力の内部を搖るがすような数々の謀略事件をたんねんに集積し推力を駆使して書いた本だ。並みの推理小説よりよほど「ぞおつ」とする恐ろしさがこみあげてくる。そうかこれが権力か、これが戦後の日本社会の裏面史なのがと痛感させられた。松本清張は逆境の人生のなか四〇歳から小説家になった「怪物作家」である。いまも黒い霧が闇の中をおおっているから、いつそう恐い。

## 飫富延久

（経営メディア学科）

①『現代の学としての経営学』三戸公

（文藝堂）

②『成熟した製造業だから大きな利益があがる』中山信義

（日本能率協会マネジメントセンター）

③『日本型企業社会の構造』基礎経済科学研究所

（労働旬報社）

①—現代社会における経営学の役割、経営学の全体構造を解明している。とくに『VI 随伴的結果—環境危機の真相と克服』では、現在最も早急な解決を迫られている環境汚染問題の源流を理論的に指摘し、その解決の糸口を示唆している。現代の経営学を簡潔に力強く開示している名著の一つである。

②—四十三年間連続増収、四十七年間連続増配、超優良企業の社長（日本エマソン株）が語る逆転の発想を論理的に解説している。「多くの日本の製造業にとって未来の光ともいえる一冊」楽しい実践書。

③—日本の企業社会の構造を日本文化にまでさかのぼり解説している。日本企業の特殊性や異質性が日本経済にもたらした功罪についても論及している。『第二部 企業社会ニッポンを解説する』ここから読み始めるのもおもしろい。一読した学生と議論をしてみたい。

# 加藤二由紀

(文学科)

- ①『黄土高原の村——音・空間・社会』深尾葉子・井口淳子・栗原伸治（古今書院）
- ②『バルザックと小さな中国のお針子』ダイ・シージエ（早川書房）
- ③『上海・ミッシェルの口紅』林京子（講談社文芸文庫）

①—中国北西部の黄土高原の村の記録。最初に村のサウンドマップを繰り広げ、活字から音が響いてきたところで、村の歴史、住空間、社会関係、秩序へと読者を案内する。音が頭を柔らかくしてくれるのか、私にとつては非日常の世界に暮らす人々の常識が、なるほどと納得される。圧巻は、「参与する調査者、評価される参与者」の章。日本のフィールドワーカーたちは渴水になく村人を元気づけようと、一流の劇団（演劇は雨乞いの儀式に関わる）を村に呼ぶ。フィールドワーカーは傍観者ではいられないのだ。フィールドワークの神髄を究めた一冊。

②—突然、山頂の寒村に住むことになつたら、何を持って行くだろう。一番近

い街まで崖っぷちの山道を歩いて丸一日、住居は高床式、そこで慣れない農作業に明け暮れるとしたら？ 一九七〇年代、中国では都市で育った十代の青少年たちが「再教育」を受けるため辺境の村々へ送られた。ある青年はバイオリンを、ある青年は自覚まし時計を、そしてある青年はトランクの底に当時の中国では禁書だった西洋の小説をしのばせた。恋に友情、策略に裏切りもある青春小説で、現代中国の歴史や文化を知らなくても十分楽しめる小説、裝丁もおしゃれ、是非手にとつてほしい。

③—最近、上海を舞台にした様々な小説が日本で書かれているが、そのイメージの源泉は一九三〇年代の上海租界だ。往時の魔都上海を少女の視線でとらえたのが、自伝風の小品集『ミッシェルの口紅』である。『上海』は日中国交回復後の再訪記。異郷であるはずの上海の路地を故郷と思い定めた林京子のことばは、読者を複眼的な思考へと誘ってくれる。林京子は私が高校生のころ『祭りの場』で脚光を浴びた作家、長崎での被爆を核とした作品も含めて、私は彼女の二十数年來の愛読者だ。

# 川間哲夫（芸術学科）

- ①『パースの記号学』米盛裕二（勁草書房）
- ②『一般言語学講義』ソシユール（岩波書店）
- ③『人間』E・カッシーラー（岩波現代叢書）

これらの本は正確に言えば「いつか読んでほしい本」です。世の中にはたくさんのがあります、本を二種類に分けてみることもできると思います。すなわちやさしく読みこなす事のできる本と簡単には読みこなす事のできない本です。私の経験から言えばやさしく読みこなす事のできる本はあまり後には残りません。一方何度も挫折し、繰り返して読んだ本は後々まで記憶の中に残ります。以上に上げた三冊の本はいずれも簡単には読みこなす事のできない本です。内容はいずれも人間の思考について述べたものです。私の専門はデザインですが、これらの本はデザインの本ではありません。しかしながらデザインを人間の思考の「現れ」と捉えれば、これらの本はデザインにとつてとても刺激であり、発想の源になります。

## 吉川信

（文学科）

- ①『ユリシーズ』ジェイムズ・ジョイス（集英社文庫）
- ②『第七官界彷徨』尾崎翠（筑摩書房）
- ③『ディコンストラクション』ジョナサン・カラード（岩波書店）

①ジョイスの『ユリシーズ』と言えばタイトルだけは聞き覚えがあるかもしれない。多分難解。話が見えない。「ここでは一体何が起こってるの？」という疑問だらけになるかもしれない。でも、だからこそ読んでみようと思う人がいたら嬉しい。解説書には事欠かない。なにせ人間の読解能力の試金石みたいな本だから、専門家も世界中で一番目か二番目に多い。「今後二〇〇〇年は私の研究で学者が忙しくなる」と予測したジョイスに、私も感謝。

②——これは最近女性監督によつて映画化されたことで、ちょっとしたリバイバルになつてゐるらしい。監督はかつて数多くの「ピンク映画」（もはや古語？）を撮つていた人だそうだけれど、原作を読んでみて、なるほどこれが「女性のエロティシズム」か、となんだかわかつたようなわからないような。ひとりの少女を取り巻く三人の青年たちの愚かしい日常は滑稽だが、少女の研ぎ澄まされた感性は彼らの一挙手一投足に過敏に反応する。地味な小説だが不思議な味がある。

（図書館にある『尾崎翠全集』にも収録されている）

③——文学理論の古典だけれど、最近は、かつての理論ブームがいささか遠い背景に退いてしまつたかな、という懸念があるので（昔の大学生からの）お薦め。入門書なので、このくらいは是非消化してほしい。構造主義以後の思想を知つておくことは、文学批評に限らず有効だと思う。サイードの前にフーコー、フーコーの前にレビューストロース、レビューストロースの前にソシユール、と遡らなければならぬ必然は気が遠くなつてくるだろうから、気絶する前に読んじよう。

## 小関和弘

（表現文化学科）

- ①『宇宙船地球号 操縦マニュアル』バックミンスター・フラー（ちくま学芸文庫）
- ②『三里塚アンドソイル』福田克彦（平原社）
- ③『反・哲学入門』高橋哲哉（白澤社）

（^）学生時代を思い返しながら考えた。先生から推薦された本なるものを読んだことがあつたろうか、と。こんなことから書き出すと、角が立つかなあ？ で、スイセンというより、自分が刺激を受けた本の中で、学生の中にも関心をもつてくれる人がいたら嬉しいな、という本を選んでみた。

①——『宇宙船地球号』なんて手あかにまみれた言葉だけれど、現在でも（現在こそ）大事な視点かも。思想家でエンジニアのフラーが、マクロの視点で世界をどう見たらいいかを示し、さまざまな発想のネタを与えてくれる。今でも多い技術バカの世界に楔を打ち込む本である。

②—マクロの視点はいいけれど、結局「地球号」の特等席に座っている奴が居るかと思えば、荷物室に押し込められている人もいるつていうのに、それを一言で「地球号」なんて言つていいのか、って考えさせてくれる本。著者はドキュメンタリー映画作家でかつて小川紳介プロで助監督を務めた人。和光にも講師として来てくださった。国家の横暴で建設が強行された成田の「東京国際空港」。そこは農民が長い時間をかけて土壌改良をした沃土の地だった。土と人の暮らしと国家権力、そのせめぎ合いを言葉がどのように切り分け、新しい思想の地平をどう切り開けるかを問うた本。六〇〇頁を超える大著。

③—行動する哲学者が現在をどう捉えているかを示す、哲学って本当は難しい学問だけれど（それを簡単そうにみせてショーバイしている哲学オバサンもいるけど）、正義とは、普遍性とはという問い合わせから始めて、現代の色々な問題に展開し、学校、民主主義について、どう考えられるかを示す。対話スタイルの文章で読みやすい。しかし中味は重い。

三冊を自分で買うと7,738円（税込み）。高いとみるか、安いとみるか……。「そうだ、図書館を活用しよう！」  
「みつかった 何が？ エエ本が キミと溶け合う教養が」（アルチュー・デ・ビンボー）ってね。↑時間があつたら、ゴダールも観ましょう。

## 小林正典

（人間関係学科）

①『チベット旅行記』全五巻 河口慧海（講談社学術文庫）

②『極限の民族』本多勝一（朝日新聞社）

③『中国史の中の諸民族』川本芳昭（山川出版社「世界史リブレット」）

①—今日のチベットは、一般的の旅行者でも訪問できる地域がある。しかしながら、広大なチベットを渡り歩くとなると、旅行者はかなりの難儀を強いられるに違いない。本書は、仏教の原典を求めたい一心から、交通手段の限られた鎖国

状態のチベットに、単身で挑んだ僧侶の旅行記である。的確な描写で記述されおり、チベット社会の風俗・習慣を知る上で必須の基本的文献である。

②著者の本多勝一は、現代文明とかけ離れた生活を送るカナダ・エスキモー、ニューギニア高地人、アラビア遊牧民の中に自ら入りこみ、共同生活の記録を通して、極限の地で生活する人々の厳しさと優しさを語る一方、現代社会に生きるわれわれの価値観の身勝手さを浮き彫りにする。ルポルタージュとして突出した内容に満ち溢れる本書は、フィールド・ワークを志す者にとつて必読書である。

③一般にわれわれが歴史の教科書で学ぶ中国の歴史は、漢族を中心とした記述が大部分を占めている。しかしながら、中国の歴史には、教科書では詳しく紹介されない様々な民族が登場する。本書では、匈奴、鮮卑、女真、契丹、蒙古等の北方民族だけでなく、長江流域以南の民族についてもわかりやすく解説されており、これから中国の少数民族について学ぼうとする者にぜひ読んでもらいたい一冊である。

## 最首悟

(人間関係学科)

- ①『旅愁』 横光利一  
(講談社文芸文庫)
- ②『苦海浄土』 石牟礼道子  
(講談社文庫)
- ③『風土』 和辻哲郎  
(岩波文庫)

横光利一の未完の書①は、わたしにとつてこの一冊です。一九三六年の春から夏、パリに行つて、翌年この本を毎日新聞に連載し始めました。一九三六年は私の生まれた年で、世界も日本も歴史の結節点のような年です。主人公の八代と千鶴子が、モネーが描いた睡蓮の庭園で、ここは奈良ではないかと感じ入る場面があります。そして、「東洋人は自然にうんざりして科学に憧れている時に、こちらじや科学にうんざりして自然をほしがつていて。しかも精神が科学に疲れ切つているのに、まだ科学的な厳密さしか信用しない。これじゃ人間は一体どうなるのだ」。

絶対の基準規範から多様な事物、個人が展開してゆく閉じた世界と、差異性か

ら同一性を求めるとして求められない開いた世界という二つの世界を考えると、人間はこの二つの世界について、どちらか、どちらも、どちらでもない、という苦闘をしてきたことがわかります。横光利一は、神道の八代、その恋人のカソリックの千鶴子、友人の無神論的国際派の久慈の関係と議論を通して、この二つの世界、精神と物質の葛藤を描こうとします。横光利一の苦闘はまさに現代のものなのです。

その関連で②と③を、日本を照らし出す必読の本として挙げます。

## 坂井弘紀（イメージ文化学科）

①『中央アジアを知るための60章』 宇山智彦編（明石書店）

②『ジャポニヤ——イスラム系ロシア人の見た明治日本』

アブデュルレシット・イブラヒム（第三書館）

③『ルバイヤート』 オマル・ハイヤーム（岩波文庫）

私が研究対象としているのは中央アジアなのだが、この中央アジアという地域がどこを指すのかいまひとつ周知されていない。学生にも中央アジアがどこにあるのか、またどのような地域であるのか、ずいぶんと誤解があるようである。①は中央アジアの歴史・文化・社会など幅広い分野について簡略に説明しており、この地域の基礎知識を与えてくれる。現在、中央アジアにかんする入門書としてはもつとも適切な書籍であろう。

ここ数年、日本ではイスラームについて取りざたされることが多くなってきているが、イスラームと日本との関係はけつして新しいものではない。②は、明治時代に来日したテュルク系ロシア人（タタール人）の日本滞在日記である。伊藤博文や大隈重信など多くの重鎮や日本各地の庶民の暮らしと接したムスリム（イスラーム教徒）による最初の日本論は、現代のわれわれにとつて必読の書である。（小松香織・小松久男訳）

③は、十一世紀ペルシアの科学者が著した四行詩集である。この詩集は刹那的

であり、虚無的であり、無常観に満ちあふれている。そしてその虚ろさを酒で埋めることのすばらしさをうたいあげる。このような考え方がイスラーム世界にあつたことに驚く人も多いのではないか。人生について深く考えさせてくれる同書に、私自身も大きな影響を受けた。もつとも十代のころは、飲酒を正当化するための術学的な口実に利用しただけであつたが。（小川亮訳）

## 酒寄進一

（表現文化学科）

- ①『新世紀へようこそ』 池澤夏樹（光文社）
- ②『昭和天皇』 上下 ハーバート・ビックス（講談社）
- ③『暁の円卓』 1・2 ラルフ・イーザウ（長崎出版）

○二年度、一年生向けプロゼミで読んだのが池澤夏樹のエッセイ『新世紀へようこそ』だった。まずはこの本をすすめたい。○一年九月の同時多発テロをうけてくれる一冊だろう。

池澤夏樹は『新世紀へようこそ』と銘打つて、僕たちを二一世紀へと誘うが、新世紀の扉をくぐったからといって、その扉をしめて過去に目をつむつていいくわけはない。

日本の二〇世紀を考えるために、ハーバート・ビックスの②をすすめたい。昭和天皇が生まれたのは一九〇一年。二〇世紀の申し子としてこの世に生まれ、文字通り二〇世紀とともに生きた人だ。昭和天皇の戦後を扱った第四部のタイトル「内省なきその人生」が痛い。

あわせて読んでほしいのがラルフ・イーザウの小説③シリーズ。一九〇〇年、一〇〇年の命を約束されて生まれた主人公デービッドが、悪の結社『暁の円卓』と戦う物語で、結社と戦うため世界中をへめぐり、二〇世紀を動かしたさまざまな人々に会う。AINシユタイン、ヒトラー、マツカーサー、ガンディー、ケネディー。またニッポンで生まれ育った主人公は、ヒロヒト親王と親友になる。

一九四五年八月の御前会議に出席し、天皇の人間宣言も主人公の進言によるというのは荒唐無稽だが、想像の力で、二〇世紀の戦争とテロの歴史をそのメカニズムまで明らかにしようとする大胆な試みだ。

AINシユタインがデービッドにこう語る場面がある。「想像力はどんな知識よりも重要だ」。そのときデービッドは心の中でつぶやく。「知識がなければ、想像力はなんの役にも立たないでしょう」

読書を通して、「知識」と「想像力」の両面をぜひ培つてほしい。

## 篠原陸治

(人間関係学科)

- ①『『日本』とは何か』 網野善彦 (シリーズ「日本の歴史」 講談社)
- ②『キリスト教思想への招待』 田川健三 (勁草書房)
- ③『脳死・臓器移植の本当の話』 小松美彦 (PHP新書)

①一本書の冒頭には、「日本」という国号は、七世紀末に決まった」と書いてある。まずは、弥生時代から始まる水田稻作を国制の基礎とした「瑞穂国日本」は虚像であると説きたいのである。さらに、「日本」は、海に囲まれた島国などではなくて、海に開いた「アジア大陸東辺の懸け橋」なのだと描く。実に、エクサイティングな「日本論」である。網野は最近亡くなつたが、通して歴史に学びつつ現代を論じる警醒家であった。つまり、本書も、きな臭い「日本」の現状の中で、私たちは何を考え何をなすべきかを、静かにときに情熱的に語っている。

②一ぼくは、かれこれ四半世紀前、田川の『イエスという男』(三一書房、絶版)を読んで感動し、以来、彼の作品はよく読んできた。表記の本は近著だが、「人間は被造物」「やっぱり隣人愛」などと誰でも知っている聖書の幾つかのテーマを論じている。とはいゝ、これは護教の書ではない。古典、歴史としての聖書を読みこなしながら、既存のキリスト教を批判し、それゆえ、同時に、私たちの在り方、生き方を問いかけていく。こうして、田川は、私たちを、キリスト教ではなくキリスト教思想へと招待する。本書を

読むと、キリスト教思想も、現代に生きる誰にも開かれていることがわかる。それは、唯一絶対ではなく、ここでは田川流である。彼の文体は、タイトルの硬さの印象を突き破つて、ときに〈べらんめい〉調で、その分、読者に迫つて、分かりやすく、折々に共感を沸かせる。

③一ばくは、小松の『死は共鳴する—脳死・臓器移植の深みへ』(勁草書房)に共鳴することから、彼のものを読んできた。本書は、「脳死」と判定されても、人は生き続けていることを、これでもかあれでもかと、しつこく科学的に証明していくのだが、それにしても、人びとは、なぜ「脳死＝人の死」と思い込んだのであろうかと問うている。「脳の働き」に託した現代人の〈それがあつてこそ人間〉という確信を反省的に分析し、さらには、「深昏睡」などという表現を止めて、「脳（の）死」と呼んでしまったことによる錯覚の過ちを説く。こんなふうに、本書は、科学的諸事実を諄々と語り続けるうちに、読者をして、人が生きているとはどういうことか、そこでの「脳・身体の働き」はどのように位置づくのかを考えさせていく。いつのまにか科学の書は哲学・倫理のそれになる。

## 杉本紀子

(表現文化学科)

- ①『表札など』 石垣りん  
(思潮社→童話屋)
- ②『水準原点』 石原吉郎  
(サンリオ出版→思潮社「石原吉郎詩集」に一部所収)
- ③『時のかけらたち』 須賀敦子  
(青土社)

①—言葉には大別して二つの面があります。言葉を使って何かを言い表わすという面と、言葉そのものが私たちを擊つという面です。今回は後者を楽しんで欲しい作品を選びました。一冊挙げるとすればこの詩集かな、というくらいで他の詩集でも必ずあなたをじつと立ちどまらせ、ハツと気づいたり、ハハツと笑つたりさせるでしょう。時にはギクツとしたりするかも知れません。とりわけ『じみ』がお勧め。

②—この出版社はもうない筈なので今はどこから出しているでしょうか。この詩

人の場合もこの詩集でなければならぬわけではありません。この詩人で私がすきなのは言葉の硬質な手応えです。『沈黙は詩へわたす／橋のながさだ』に始まる冒頭の詩『橋』などのつけから圧倒されます。そう、詩は言葉がその背後に膨大な沈黙の世界を背負つてることをずしりと感じさせてくれます。時にはこの沈黙の豊かさに浸つてみましよう。そして闇空に輝く星のような言葉のそれにも。

③——この著者も他の作品でも構いませんが、この作品を選んだのは、これが著者の最期のエッセイであること、著者が長く生活をしていたヨーロッパについての著者特有の鋭くてしかも暖かい思索に満ちているからです。「ヨーロッパについて」と言いましたが、この本を読んだあなたはきっとヨーロッパについて以上に須賀敦子という豊かな人柄に触れた思いをする事でしょう。ものをよく見て考えること、年を取ることも悪くはないなと思わせてくれます。

## 中力えり

(人間関係学科)

①『ナショナリズムの克服』 姜尚中・森巣博

(集英社新書)

②『9・11（ナイン・イレブン）ジエネレーション——米国留学中の女子高生が学んだ「戦争」』

岡崎玲子

(集英社新書)

③『イスラームの世界地図』 21世紀研究会編

(文春新書)

①——東大教授の姜尚中氏とオーストラリア在住の賭博師兼作家である森巣博氏の対談をおこした本である。大変読みやすい文体で書かれているが、中身は濃いものとなつていて。知つているようで知らないことが多い「日本」について、あらためて考えてみるときっかけを与えてくれるはずである。「ナショナリズム」を理解するためのよい入門書であり、さらなる探求を促すような本もある。

②——一〇〇一年九月十一日の同時多発テロ事件発生の際、アメリカの高校に留学していた著者が、見聞きし、考えたことをまとめた本である。同年代の者が書

いた本ということで、興味を持つて読むことができると同時に、大いに刺激になるのではないだろうか。テロ事件を通してみたアメリカ社会についての分析だけでなく、アメリカでの高校生活、さらには学ぶ際の基本的な姿勢についても触れられており、大学で学ぶ上でも参考になると思う。

③—テレビや新聞で毎日のように中東情勢についてのニュースに触れていると、そこでおきていることを把握した気になつていなかろうか。しかし、我々は「イスラム」についてどれだけ知っているといえるだろうか。メディアによつて伝えられるイメージだけで判断するのではなく、問題を理解するためには、歴史的な背景やイスラム世界について、まず知ることが重要であろう。本書を読むことからはじめてみてはどうだろうか。

## 津野海太郎

(イメージ文化学科)

- ①『絵本・夢の江戸歌舞伎』 一ノ関圭・服部幸雄  
(岩波書店)
- ②『青い蓮』 エルジユ (福音館書店)
- ③『外骨という人がいた』 赤瀬川原平 (ちくま文庫)

私のゼミのテーマは「イメージの編集」である。たくさんイメージをあつめ、えらび、くみあわせ、そのことで新しい意味をつくりだすこと。この作業にかかる本を三冊あげておく。どれも理屈ぬきに面白い本だけど、理屈がつけば、もつと面白くなる。そのための必読書を、ついでにもう一冊ずつ。

①の作者、一ノ関圭の名を見ておどろいた。なぜかすがたを消してしまった七〇年代の人気漫画家じゃないか。その伝説の人が十年がかりでつくった大型絵本、江戸の大劇場の日常が、おどろくべき精密さで再現される。もつと詳しいことが知りたくなつたら、共著者の労作『大いなる小屋』(平凡社ライブラリー)を読

むべし。

②は、あまりにも名高いベルギーの人気漫画タンタン・シリーズの一冊。一九三〇年代、日中戦争直前の中国が舞台になる。盧溝橋事件や抗日デモ。なぜエルジエはこんな漫画をかいたのか。マイクル・ハー『タンタンの冒険・その夢と現実』（サンライズ）が、エルジエ財団の所蔵する膨大なイメージ資料を解説して、かくされた秘密をあかしてくれる。

③の外骨は「ガイコツ」と読む。宮武外骨。明治から昭和前期にかけて、おびただしいかずの雑誌を独力でだしつづけたミニコミ巨人。もと前衛芸術家の著者が、まちの古本屋から、この忘れられかけた大奇人のしごとを発掘してゆく。その愉快な報告書。和光の図書館にも、外骨がつくった『頓知新聞』『スコブル』『面白半分』などの復刻版がズラリとそろっている。まずはそれを眺めてみよう。ふたつの目に力をこめて。

## 堂前雅史

（人間関係学科）

①『トンデモ日本の世界S』『トンデモ日本の世界T』と学会（太田出版）  
②『銃・病原菌・鉄——一万三〇〇〇年にわたる人類史の謎』

ジャレド・ダイアモンド（草思社）

③『紅樓夢』曹雪芹

（岩波文庫）平凡社ライブラリーなど他からも出ている

①——と学会の同シリーズの最新刊が一度に二冊出た。アポロ月面着陸はアメリカの陰謀だと思つてゐる人、自分と恋人の相性が悪いのは血液型のせいだと思つてゐる人、そんな話を信じる気はしないが、そんな話を言いふらしているやつに興味があるという人、そんな方々は、と学会の新作を是非お読みあれ。意地悪に疑うことの楽しさを味わえる。

②——生物学者が人間の歴史を書くと、こんな感じになるとと言う本。よつて、よく読むと歴史や文化についての事実が間違つてたりすることもあるが、全体と

して歴史の中に生態学的な必然性を見いだそうという視点は「へゝ」を連発したくなる感じがある。このところの自然人類学や古生態学の知見の急速な蓄積で、この本の内容も古いものになるのは時間の問題であろうが、どんなに文明が進もうと、人間が自然の中の一部であることにはかわりがないことを実感させてくれることは大切。

③最後は、中国の長編小説。乱暴に言えば、貴族社会の超豪華な生活の中で、ローティーンの美男美女がウジウジ・イチャイチャを延々と続ける物語。初めて読んだ時はそのきらびやかさに幻想されたが、二度目に読んだ時は厭世的な枯れきった人生観が見えてきて興奮を覚えた。長編小説は読むたびに新たな発見があるから楽しい。

## 長尾洋子

(表現文化学科)

- ①『記号の知／メディアの知——日常生活批判のためのレッスン』石田英敬(東京大学出版会)
- ②『フィールドワークの技法——問い合わせる、仮説をきたえる』佐藤郁哉(新曜社)
- ③『女子プロレス民俗誌』亀井好恵(雄山閣)

①——大学生にもとめられる最も大切な態度、それは「考える」ということだろう。何も深刻な顔をする必要はない。この本は、軽やかに、のびやかに、考える術と道具立てを示してくれる。考察の対象となるのは私たちがどっぷりと浸つているために、かえって考えることを怠りがちな日常生活。現代人の日常をテレビ、広告、サイバースペース、都市など「メディアに媒介されて成立する意味環境一般」ととらえ、記号論の知識と発想できりこんでいく。

②——フィールド（現場）で自分の五感と知性を研ぎ澄ませながら調査を行なうフィールドワークはとても魅力的だ。でも、なぜフィールドワークをするのか、

どのようにフィールドワークを行なえばよいのか、フィールドワークの成果はどのような形をとりうるのか、そもそもフィールドワークとは何か。本書を手に、一度は立ち止まって考えて欲しい。同じ著者による『フィールドワーク 書を持った街へ出よう』（新曜社）もおすすめ。

③一本書は一見アカデミックな考察に倣しそうもない「女子プロ」を鑑賞性、営利性、娛樂性をそなえた戦後日本の芸能ととらえ、レスラーたちの闘う身体の獲得過程、ファンの生態、メディアの役割等を論じている。民族誌（エスノグラフィー）を読んだことのない学生には最初の一冊としてすすめたい。またポピュラー文化、サブカルチャー、スポーツなどを対象にレポートや卒論に取り組もうとする人には方法・形式の面でぜひ参考にしてほしい。

## 野中浩一（人間発達学科）

- ①『マックスウェルの悪魔——確率から物理学へ』都筑卓司（講談社ブルーバックス）
- ②『ウニと語る』團勝磨（学会出版セントラル）
- ③『生まれ月学～胎児期環境の影響』三浦悌一（東京都立大学出版会）

いまさら数式の並んだ自然科学の本をひらく気にはならないだろう。でも、ちょっと覗いてみると結構新しい世界が見えるかもしない氣楽に読める本を紹介しておこう。

①は、私の中学生時代の思い出の一冊もある。空気はなぜつもらえないのか？ 空気には含まれる分子だつて重さはあるはずなのに……、不思議なことに感じないだろうか？ 本書は「エントロピー」という概念を巧みに解説した啓蒙書であり、熱力学の入門書である。理科系の学生にもわかりやすい概念ではないが、環境問題に関する学生なら一読の価値がある。

②の著者が退職後に三崎の臨海実験所で飄々と研究をお続けになられるお姿を、修士時代の私は隣の実験室からお見かけしていた。「生物学者は自炊が必修科目だよ。ボクは今日はハンバーグなんだ」などと気安くおっしゃつたりするものだから、身近なモデルだと一瞬錯覚してしまつたが、それはとんだ勘違い。腕白な留学時代の逸話、当時では珍しい国際結婚、第二次世界大戦に翻弄されながらも「The last one to go」で示された、凜とした研究者としての矜持、週末研究者を強いたられた学生紛争時代の学長生活、そして、退職後の研究再開……。老学者にありがちな、宗教的自然観に陥ることなく、生涯職人を通された著者はすがすがしい。自然にはまだまだ学ぶべき未知がつまっている。

③は私の恩師の近著。本書の内容は「生まれた月による違い」をしつこく追究しただけともいえる。しかし、研究という営みが謎解きのプロセスであり、教科書に書かれるような無謬の体系らしきものは、ほんの一端にすぎないことも教えてくれるだろう。多くの研究が既存の知識をほんの一歩だけ先に進めようと汲々としがちなのに対し、この本で描かれている研究は大げさに言えば「パラダイ

ム創成型」のそれである。細部をないがしろにしない常識人としての規律と、常識にとらわれない研究者としての非常識な感性とが一体となつた著者の姿は、私にとつてはまだに謎である

## 野村忠央

(文学科)

①『日本人の英語』『続　日本人の英語』マーク・ピーターセン

(岩波新書)

②『なぜ日本人は日本語が話せるのか』今井邦彦

(大修館書店)

③『謎解きの英文法　冠詞と名詞』久野暉・高見健一

(くろしお出版)

①私たち英語（あるいは英文法）を知識として暗記することは可能でも、それを感覺として理解することは（英語に相当熟達している人であつても）かなり難しいと言えます。この本はその感覺を、英語を母国語とする著者（大学で近代日本文学を専攻）が「日本語で」わかりやすく紹介してくれている本です。ト

ピックとしては、日本人にとつて間違いやすい「冠詞」や「A of B」の表現（＝明治な大学？）、「Ifの条件節では未来形を本当に使わないのか？」などなど、卒論のテーマになりそうなものもたくさんつまっています。一読を薦める一冊です。

②一本書は、長年に渡つて難解な言語学を平易な言葉で紹介してきた著者の、「ことばの謎と驚き」を綴つたエッセイ集です。表題の「なぜ日本人は日本語が話せるのか」という一見当たり前の、でも普通は答えられない問題を初め、ことばにまつわる二十のエッセイが収められています。また、この著者は非常に英語や笑い、日本の古典芸能にも通じた人で、「英語で文句をつけてみよう」、「日本の『笑い』と英語の『笑い』」、「日本語は美しいか」などというトピックもあります。興味を持った章からつまみ食いで読んでみてくれたらと思います。

③私は高等学校でも教鞭を取つていましたが、英文法の時間、「冠詞」の項を教えるのはあまり気が進みませんでした。理由は、冠詞はどうも統一的説明が

難しく、また「説明」にも例外事項が多くて、結局個々の項目を暗記させる授業になりますがちだからだと思います。その点、今まで冠詞にまつわる本を何冊か読みましたが、この本は今まで読んだ中で一番わかりやすく（「です・ます」体で書かれ、イラストもあり）、「なるほど！」と思え、目から鱗が落ちる話が多い冠詞の本でした。わかりやすい説明の見本としても薦めたい一冊です。

## 半田滋男

（芸術学科）

- ①『美学辞典』佐々木健一（東京大学出版会）
- ②『現代アート入門』小林康夫・建畠哲編（平凡社）
- ③『ポートの三人男』ジエロームK・ジエローム（申公文庫）

僕の所にはよく若い作家が作品を見せにくる。だが悲しいかな、大抵は自分の表現に対する想いが強すぎて自己中心になりがちだ。欠点が見えないから、思つ

たほど他人の共感を得られない。いつも言つてますが、表現することと受容（鑑賞）することは同じコトの両面。受容を意識して本を挙げます。

①ソクラテス以来の「美」についての思索の軌跡を「表現」「かたち」といつたわずか二三の概念を通じて、日常的な言葉で要領よくまとめてある。「辞典」だが通読に耐える。疑問に思った事柄を巻末の索引からで検索してもいいし、どこかの章だけを拾い読みしてもいい。

②制作の壁にぶち当たったとき、かつて自分にモチベーションを与えた芸術体験を反芻することが出来れば励ましになる。この本は一八人の碩学が自分が最も関心をもっている作品の魅力を綴つたもの。取り上げられているのはニューヨン、ウォーホル、河原温……。国内で実見できる現代の古典ばかり。感動や疑問を言語化するプロセスのサンプルとしても有益。

③一場違いな上に甚だ専門違いな本を挙げさせてください。自己表現を相対化するためには、本物のユーモアセンスを身につけるのもいい訓練だと思う。逆説訳。

的だが自己中心の人ほどユーモアを解さないものだから。一九世紀末、三人の英國紳士がボートで川下りに出かけた顛末を描いたユーモア文学の古典。丸谷才一訳。

## 三上豊

（芸術学科）

- ①『日本婦道記』 山本周五郎 （新潮文庫）
- ②『ヒッチコック 映画術』 フランソワ・トリュフォー （晶文社）
- ③『河よりも長くゆるやかに』 全2巻 吉田秋生 （小学館）

学生のときに涙して読んだ本として①をあげる。周五郎の戦中期の短篇集。「婦道」ということばは現代では死語だし批判も受けよう。講談社刊行の一九七一年版で読んでいる。ページをめくっていても、今ではどこで涙したか思い出せないが、当時、短篇小説をやたら読んでいた頃で、しばらく周五郎にはまつて

いつた記憶がある。

②は、映画を見ることは、「こういつたことか」と教えられた本。アルフレッド・ヒッチコックへのフランソワ・トリュフォーのインタビュー集。通訳の女性も賢そう。なによりもトリュフォーの映画への愛情があり、何回となく読み返したことがある。美術書にはこうしたワクワクするような本がないとするのは、私の美術への愛情が浅いせいもあると反省。

③は、若い頃を思い出して、といった感じで選んでみた。最近低調な吉田秋生だが、これは最も好きな作品。発表は一九八三年で、コミック版の一九八五年版で読んでいるようだ。基地の町で、ときに大麻などやっている高校生の姿を描いている。まったく自分の高校時代とはちがうのだが、共感をもって面白く読んだ。構成、ネーム、コマの構図が物語とかみあつている。彼女の「ページの白さ」は批判されもするが、このマンガでは、その白さが登場人物のシラケた感じと合っている。

そう、美術の本では、ゴンブリッヂの『美術の歩み』をあげよう。推理小説のように一気に読めた数少ない美術書の一冊だ。

## 二宅輝幸

(経営メディア学科)

- ①『松下の中村改革』 日経産業新聞編集部 (日本経済新聞社)
- ②『俺ならこう売る!』 藤巻幸夫 (青春出版社)
- ③『本田宗一郎 夢を力に』 本田宗一郎 (日経ビジネス人文庫)

①—ナショナル・パナソニックという世界ブランドを背に、大量生産・大量販売のビジネス・モデルを確立した〈家電の巨人〉松下電器。しかし、二〇世紀の勝者も二一世紀には赤字に転落、経営の危機へ。作れば売れるという「おごり体質」が二〇年間もヒット商品を生むことをさせた。創業の松下家とは、最も遠い中村邦夫新社長だからこそ可能となつた、松下王国の大手術。逆境から立ち

## 上がる実力派リーダー、中村社長の経営改革の実態。

②——一二〇年の歴史を誇る名門衣料品メーカー「福助」はなぜ破たんしたか？その債権を託された、かつてのカリスマ・バイヤー藤巻幸夫氏。バブル崩壊でモノが売れないと時代に、行列ができるほどの人気商品を自ら開発、販売して、伊勢丹のファッションを変えた男。しかし、その藤巻氏といえども、自分のセンスを磨くために汗と涙の苦労を経験。氏は断言する、「天才は生まれつきのものではなく、努力の結果だ。」営業の天才のモデルが見える。

③修理工から世界のスピードに挑戦した男、本田宗一郎。TTレース、F1レースと次々にスピードで世界を制覇し、敗戦日本に夢と希望を与えたホンダ。しかし、スピードのホンダは今や排気ガス対策や燃料電池車で世界をリードする〈環境〉のホンダに。「会社のためではなく、社会のために働く」「人まねは絶対にするな」「日本一ではなく、世界一だ」義務教育しか受けていない宗一郎が、世界一のホンダを築いたホンダ・イズムの夢とロマン。

## 村井紀

(文学科)

- ①『墮落論』坂口安吾（新潮文庫）
- ②『エセー（随想録）』モンテール（岩波書店）
- ③『若きウタリに』バチエラーハ重子（岩波文庫）

まず読んでアタマがよくなる坂口安吾の『墮落論』を薦める。これほど明快で、開放感ある批評はそうはない。

次に〈実用書〉。青年期に読んだ本で、一番得をした本を挙げる。モンテールの『エセー』だ。恋愛の問題はアランや漱石でもいいが、友人関係、バイト先、家、葛藤だらけの、キミの日々のさまざまな悩みには、これである。時には、誰にも相談できないことにぶつかる。その時、この本が確実に役に立つ！たとえば、平和が好きな私だつて、時には、ヒトとケンカをしなければならない。その時、第三巻八章は、たちどころにその仕方を教えてくれる！知友に裏切られることがある。その時には、同九章をあければいい。これまで蒙った「私の負債

に対する弁済、償却とみなす」と、即解決してくれる。モンテーニュは平凡な「奇蹟も異常もない生活」をもつとも「美しい生活」であると称えた。私は、この本のおかげで「他人の境遇」を羨むことも、超越的な思想にのぼせることもしなくて済んだ。

おそらく、「エセー」など読んでいるヤツはキミのまわりにいないだろう。それゆえ読むべきだ。なぜなら、確実に優越感が手に入る。彼が言うように、本は青年期には虚栄心で読むものなのだ。

いち早く、未来（多言語・多文化の世界）を切り開いていた八重子の短歌『若きウタリに』も一読を薦める。これまでの日本語・日本文学の枠組みでは見えたかった世界だ。

## 余田真也

（文学科）

①『エクソフオニー——母語の外へ出る旅』 多和田葉子

（岩波書店）

②『活字狂想曲——怪奇作家の長すぎた会社の日々』 倉阪鬼一郎

（幻冬舎文庫）

③『レトリック感覚——ことばは新しい視点をひらく』 佐藤信夫

（講談社学術文庫）

わたしの専門分野（アメリカ文学）における数冊の傑出した本は、どうやら一人での読書にはあまり向かないようなので、そういうものは授業を通じて強制的に読んでもらうことにして、ここでは（1）一般向けに書かれたもの、（2）入手しやすいもの、（3）言葉に関する感度を問うもの、という三点を満たす本をいくつかお薦めしておきたい。

①を読むと、文芸の最大の魅力とは、物語の内容や、導き出される思想や、醸しだされる雰囲気ではなく、むしろ「ことば」そのもの（創造的な、選び抜かれた不思議な力をもつことば）にあるということがよくわかる。ヨーロッパを拠点にドイツ語と日本語で小説を書く彼女だからこそ説得的。小説『容疑者の夜行列車』（青土社）はその実践篇とも言える感動作である。

②は、小説を書きつつ印刷会社で校正の仕事をしながら糊口をしのいでいた頃の回想録。日本的な会社組織への違和感を、誤字脱字をめぐる地味な現代民俗誌のなかに、ゆるゆるとユーモアたっぷりに披瀝する。著者は一九二九年に出版されたT・S・ストリーブリングの超絶探偵小説『カリブ諸島の手がかり』（国書刊行会）の翻訳もつとめている。

最後にやや学術色の濃い書物。③は、古代ギリシャから近代ヨーロッパに受け継がれたレトリック（言語表現に説得力と魅力を与える技術）に、豊富な事例を用いて再検討を加えつつ、「発見的認識の造形」というレトリックの第三の役割を探り、日本語表現の創造的な可能性を開こうとする刺激的な労作。続編の『レトリック認識』（講談社学術文庫）でもその試みがさらに展開される。

## 綿引弘

（経済経営学部）

①『現代を読む　〈100冊のノンフィクション〉』佐高信

（岩波新書）

②『地球環境報告　2』石弘之

（岩波新書）  
③『世界の歴史がわかる本（三部作）』綿引弘

（三笠書房・知的生き方文庫）

①——若い人の読書離れにはいろいろな要因があると思われるが、「読書が何の役に立つか？」という迷いも一因ではないだろうか。読書をしない人に読書の喜びは解つてもらえない。そのような人に最初に薦めたいのが現代の生々しい政治・社会・経済の実態を鋭くえぐったルボルタージュである。企業社会、暴力団、差別、アジア、戦争、教育などの100冊のノンフィクションが要約されている。ここから読書の欲びを体験して欲しい。

②——共通教養の「世界史の鉱脈」で「環境の世界史」の概観をしている。この地球上に人類が誕生してから今日までの人類の歩み—それが世界史である—がもたらした帰結、それが現代世界である。その帰結が人類の生存を根底から脅かす大変な危機「瀕死の地球環境」であるとは何という皮肉であるうか。現代まで人類が嘗々と築きあげてきた努力は何であったのか、どうすればこの危機を打開で

きるのか、君たちの未来がかかっているのである。

③拙著で恐縮であるが、雑誌『ダカーポ』に載った書評で紹介に替えた。  
「コンビニの棚で見かけたら、歴史面白暴露ものと誤解されそうな題名、表紙である。だがまじめな世界通史だ。通史に重要なのは、過去・現在・未来、各国間の関わり合いを、いかに明確に記述するかということだ。これは神の目の高さにどこまで近づけるかという作業もある。この本の目線はかなり高く、一人の筆者を立てて作っているせいか、視線にぶれがない」

どうやつて  
本を手に入れるか？

では、ここであげられている本を手にするにはどうしたらいいのか。「借りる」と「買う」のふたつの場合にわけて、ざつと説明しておきます。

## 【借りる】

和光大学図書館内に書棚を特設しました。そこに、ここで推薦された本を、それぞれ何冊かずつ置いてあります。場所はカウンターの先、リファレンス・コーナーの入り口のあたりです。

### 和光大学図書館の特設書棚で借りる。

小説や軽いエッセイ集といった比較的やわらかな本は、専門書を中心の大学図書館よりも、近所の公共図書館のほうがさがしやすいでしょう。

いまは公共図書館でも目録をオンラインで公開しているところが多いので、図書館に行くまえにインターネットで調べておくと無駄足を踏まずにすみます。

## 【買う】

### 新刊書店で買う。

いまは一年に七万五〇〇〇冊の本が出版されています。この数は、いっぽんの書店に扱える量をはるかに越えています。

料はじぶんで負担しなければなりませんが。（友だちと共同で何冊か購入すれば、ほとんどのオンライン書店で送料がタダになります）

### 古書店（古本屋）で買う。

したがって、ちょっと古い本やあまり売れない本は、たちまち書店から姿を消してしまいます。オンライン目録を公開している大型書店の場合は、前もってインターネットで在庫の有無をしらべておくといいでしよう。

いそいで入手したい場合はオンライン書店を利用するといい。もちろん送

関連本その他、知りたいことがあれば遠慮せずに図書館員に相談してください。

## 近所の公共図書館で借りる。

ふらりと入った古書店で必要とする本をピタリと探せる可能性はほとんどありません。古本屋は「本との偶然の出会い」をたのしむ場と割り切ったほうがいいでしよう。

ただし、山とか映画とか植物などの専門書店のばあいは別です。じぶんが関心のある分野の専門書店をみつけておくといでしよう。

したがつて、すぐ欲しい場合は、オンライン古書店の利用をすすめます。

複数の古書店が共同でひらいているホームページがいくつもありますから、

それをつかえば、たいていの本は見つかると思います。

もちろん、ネット・オークションで

やすく入手することもできます。すぐに必要な本にぶつかる可能性はありませんけれどね。

### 最後にお願いがあります。

この小冊子への感想や希望、あるいは読んだ本の感想など、なんでも図書館あてに送ってください。メールでも

アクセスでもカウンターに持参してください。「私が推薦する本」も歓迎です。

そのうちのいくつかを、つぎの小冊子や来春刊行予定の本に掲載させてもらおうと考えています。よろしくお願ひします。

# 「本を読もう!」ブックリスト①

(2004.10.1現在)

## あ行

- 1『青い蓮』(タンタンの冒険旅行 14) エルジエ  
福音館書店 1993年 1,680円
- 2『暁の円卓』(1~3) ラルフ・イーザウ  
長崎出版 2004年 @1,995~2,310円
- 3『遊びと人間』ロジェ・カイヨワ  
講談社《学術文庫》1990年 1,260円
- 4『怒りの方法』辛淑玉  
岩波書店《新書》2004年 735円
- 5『意識と本質 精神的東洋を索めて』井筒俊彦  
岩波書店《文庫》1991年 798円
- 6『イスラームの世界地図』21世紀研究会  
文芸春秋《新書》2002年 788円
- 7『一下級将校の見た帝国陸軍』山本七平  
文芸春秋《文庫》1987年 540円
- 8『一条ゆかり主義』一条ゆかり  
白泉社 2001年 880円
- 9『一般言語学講義』ソシュール  
岩波書店 1991年 4,515円
- 10『宇宙船地球号操縦マニュアル』バックミンスター・フラー  
筑摩書房《文庫》2000年 945円
- 11『ウニと語る』団勝磨  
学会出版センター 1988年 2,548円
- 12『生まれ月学 胎児期環境の影響』三浦悌二  
東京都立大学出版会 2002年 2,835円
- 13『エクソフォニー 母語の外へ出る旅』多和田葉子  
岩波書店 2003年 2,100円

本を読もう!  
――きみたちに読んでほしい本を3冊あげると――  
〔第一集〕

F T 〒一九五八五八五  
A E L .. ○ 四四一九八九一七四九四  
.. ○ 四四一九八九一三五〇

二〇〇四年九月三〇日発行  
発行 和光大学附属梅根記念図書館  
〒一九五八五八五 東京都町田市金井町二二六〇

- 14『エセー』(全6巻) モンテーニュ  
岩波書店『ワイド版文庫』1991年 @1,260～1,470円
- 15『絵本夢の江戸歌舞伎』一ノ関圭、服部幸雄  
岩波書店 2001年 2,730円
- 16『黄土高原の村』深尾葉子ほか  
古今書院 2000年 2,730円
- 17『俺ならこう売る!』藤巻幸夫  
青春出版社 2004年 1,365円

## か行

- 18『外骨という人がいた!』赤瀬川原平  
筑摩書房『文庫』1991年 840円
- 19『活字狂想曲』倉阪鬼一郎  
時事通信社 1999年 1,680円
- 20『カルチュラル・アイデンティティの諸問題』S・ホールほか  
大村書店 2001年 2,730円
- 21『河よりも長くゆるやかに』吉田秋生  
小学館『文庫: コミック』1994年 660円
- 22『記号の知 / メディアの知』石田英敬  
東京大学出版会 2003年 4,410円
- 23『宮廷の道化師たち』アヴィクル・ダガン  
集英社 2001年 1,890円
- 24『極限の民族』(本多勝一集9)本多勝一  
朝日新聞社 1994年 4,282円
- 25『キリスト教思想への招待』田川建三  
勁草書房 2004年 3,150円
- 26『苦海浄土』石牟礼道子  
講談社『文庫』1982年 580円
- 27『現代アート入門』小林康夫、建畠哲  
平凡社 1998年 2,520円

- 28『現代教育の思想と構造』堀尾輝久  
岩波書店 1992年 1,121円
- 29『現代日本女性史』鹿野政直  
有斐閣 2004年 2,310円
- 30『現代の学としての経営学』三戸公  
文眞堂 1997年 1,600円
- 31『現代を読む 100冊のノンフィクション』佐高信  
岩波書店『新書』1992年 693円
- 32『紅樓夢』(全12巻)曹雪芹  
平凡社『ライブラリー』1996～97年 @1,223円
- 33『小森陽一ニホン語に出会う』小森陽一  
大修館書店 2000年 1,680円
- 34『コルシア書店の仲間たち』須賀敦子  
文芸春秋『文庫』1995年 459円

## さ行

- 35『三里塚アンドソイル』福田克彦  
平原社 2001年 5,093円
- 36『ジャポンヤ』アブデュルレシト・イブラヒム  
第三書館 1991年 2,625円
- 37『ジャン・クリストフ』(全4巻)ロマン・ロラン  
岩波書店『文庫』1986年 @798円
- 38『上海』(『ミッセルの口紅』所収)林京子  
講談社『文芸文庫』2001年 1,575円
- 39『鉄・病原菌・鉄』(上・下) ジャレド・ダイアモンド  
草思社 2000年 @1,995円
- 40『昭和天皇』(上・下) ハーバート・ビックス  
講談社 2002年 @2,415円
- 41『女子プロレス民俗誌』亀井好恵  
雄山閣 2000年 2,625円

- 42『新世紀へようこそ』 池澤夏樹  
光文社 2002年 1,470円
- 43『水準原点』 石原吉郎  
サンリオ出版 1972年
- 44『成熟した製造業だから大きな利益が上がる』 山中信義  
日本能率協会マネジメントセンター 2004年 1,575円
- 45『世界の歴史がわかる本』(全3巻) 編引弘  
三笠書房《文庫》 2000年 @560円
- 46『第七官界彷徨』(『尾崎翠集成』上巻に所収) 尾崎翠  
筑摩書房《文庫》 2002年 1,050円
- 47『第二の性 ; 決定版』(1 ~ 2 ~ 2 ) ポーヴォアール  
新潮社《文庫》 2001年 @820 ~ 860円

## に行

- 48『墮落論』 坂口安吾  
新潮社《文庫》 2000年 540円
- 49『地球環境報告』(2) 石弘之  
岩波書店《新書》 1998年 777円
- 50『チベット旅行記』(全5巻) 河口慧海  
講談社《学術文庫》 1993年 @735 ~ 756円
- 51『中央アジアを知るための60章』 宇山智彦  
明石書店 2003年 2,100円
- 52『中国史のなかの諸民族』 川本芳昭  
山川出版社 2004年 765円
- 53『沈黙の春』 レイチェル・カーソン  
新潮社《文庫》 2004年 660円
- 54『ディコンストラクション』(全2巻) ジョナサン・カラー  
岩波書店 1998年 @2,520円
- 55『時のかけらたち』 須賀敦子  
青土社 1998年 1,680円

- 56『トンデモ本の世界(S)』と学会  
太田出版 2004年 1,554円
- 57『トンデモ本の世界(T)』と学会  
太田出版 2004年 1,554円

## に行

- 58『9・11 ジェネレーション』 岡崎玲子  
集英社《新書》 2004年 693円
- 59『ナショナリズムの克服』 姜尚中、森巣博  
集英社《新書》 2002年 735円
- 60『なぜ日本人は日本語が話せるのか』 今井邦彦  
大修館書店 2004年 1,575円
- 61『謎解きの英文法 冠詞と名詞』 久野暉、高見健一  
くろしお出版 2004年 1,470円
- 62『日本型企業社会の構造』 基礎経済科学研究所  
労働旬報社 1992年 2,940円
- 63『日本語の歴史 青信号はなぜアオなのか』 小松英雄  
笠間書院 2001年 1,995円
- 64『日本人の英語』(正・続) マーク・ピーターセン  
岩波書店《新書》 1988年 @735円
- 65『日本』とは何か』(日本の歴史00) 綱野善彦  
講談社 2000年 2,310円
- 66『日本の黒い霧』(上・下) 松本清張  
文芸春秋《文庫》 1985年 @540 ~ 570円
- 67『日本婦道記』 山本周五郎  
新潮社《文庫》 2002年 500円
- 68『人間』 カッシーラー  
岩波書店《文庫》 1997年 840円
- 69『脳死・臓器移植の本当の話』 小松美彦  
PHP研究所《新書》 2004年 998円

## ま行

### は行

70『パースの記号学』 米盛裕二

勁草書房 1981年 3,465円

71『バードケージ』 清水義範

日本放送出版協会 2004年 1,680円

72『パリの憂鬱』 C・ボーデレール

新潮社《文庫》 1983年 340円

73『パリの憂愁』 C・ボーデレール

新潮社《文庫》 1983年 340円

74『バルザックと小さな中国のお針子』 ダイ・シージエ

早川書房 2002年 1,785円

75『反・哲学入門』 高橋哲哉

白澤社 2004年 1,785円

76『美学辞典』 佐々木健一

東京大学出版会 1995年 3,990円

77『ヒッチコック映画術』 トリュフォー

晶文社 1990年 4,200円

78『表札など』 石垣りん

童話屋 2000年 2,100円

79『フィールドワークの技法』 佐藤郁哉

新曜社 2002年 3,045円

80『風土』 和辻哲郎

岩波書店《文庫》 1979年 693円

81『ポートの三人男』 ジェローム・K・ジェローム

中央公論新社《文庫》 1992年 680円

82『本田宗一郎夢を力に』 本田宗一郎

日本経済新聞社《文庫》 2001年 680円

83『マックスウェルの悪魔』 都筑卓司

講談社《ブルーパックス》 2002年 1,029円

84『松下の中村改革』 日経産業新聞編集部

日本経済新聞社 2004年 1,470円

85『マルクスのために』 ルイ・アルチュセール

平凡社《ライブラリー》 1994年 1,631円

## や行

86『やさしいことばで日本国憲法』 池田香代子ほか

マガジンハウス 2002年 1,000円

87『谷中村滅亡史』 荒畑塞村

岩波書店《文庫》 1999年 525円

88『逝きし世の面影』 渡辺京二

葦書房 1998年 4,410円

89『ユリシーズ』(全4巻) ジェイムズ・ジョイス

集英社《文庫》 2003年 @1,200円

90『与謝蕪村 郷愁の詩人』 萩原朔太郎

岩波書店《文庫》 1988年 483円

## ら行

91『蘭学事始』 杉田玄白

岩波書店《文庫》 1982年 525円

92『旅愁』(上・下) 横光利一

講談社《文芸文庫》 1998年 @1,680～1,785円

93『ルバイヤート』 ウマル・ハイヤーム

岩波書店《文庫》 1979年 420円

94『レトリック感覚』佐藤信夫  
講談社《学術文庫》1992年 1,155円

わ行

95『若きウタリに』バチェラー八重子  
岩波書店《文庫》2003年 945円

- このリストは『本を読もう！』(第1集)の本文で紹介されている本を、50音順に配列したものです。データは、書名、著者名、出版年、価格の順で記してあります。
- 作品によっては様々な出版年、出版社から出版されていることもありますが、比較的購入しやすいものを優先して掲載しています。
- 価格は税込表示です。「@」は多巻本の単価を表し、また、「@○円～□円」は各巻の価格帯を表します。
- 原則として図書館で所蔵していますが、入手困難につき所蔵できなかったものも数点あります。お困りの際は、図書館カウンターでご相談ください。